

普及活動情勢報告（平成19年6月分）

安芸農業振興センター 農業改良普及課

情勢報告

北川村ゆずの振興に向けてまず一歩



北川村のユズをもう一度、日本一の産地へと行政、農協、農家で「ゆず振興協議会」を6月に立ち上げ、活動を開始した。まず、6月11日から6地区で夜間の座談会を開催し、作成した「振興ビジョン」、農協の販売、柚子部の活動などへの農家の生の声を聞かせてもらった。振興センターへは、幹腐病の対策、またきめ細かな技術指導、高齢者対策などへの要望があった。振興センターでは、今年から重点で取り組むこととしており、この意見を集約し、モデル地域の選定を行い集落営農に取り組む。

JA土佐あき花き部安芸支部球根部会の活動



JA土佐あき花き部安芸支部球根部会は、県内他産地に比較して新しい産地であるため、「安定した品質で一定の量を市場に送る。」ことを目的としてオリエンタル系ユリを栽培している。

そのため、ユリの栽培期間には、「全員でお互いのハウスを見て意見交換をする。」をモットーに毎月現地検討会を行い、意見交換を行っている。また定例会では、出荷規格や作付けに関して調整を行うなど、全員で話し合いながら部会の方向を決めている。

振興センターは、この部会に対して、JAの担当者と連携し、ユリの生育や圃場の状況を確認しながら、安定した品質・生産量を持つ産地育成を行う。

JA土佐あき室戸支所キュウリ部会がキュウリ黄化えそ病対策講習会を開催する。



キュウリの黄化えそ病の状況

今作、室戸市のキュウリ栽培農家の全戸のほ場で、キュウリ黄化えそ病が発生した。

この病気が発生すると、著しく減収になる。部会では、来作（20園芸年度）で20トン/10a どりを目標に掲げる計画であるが、そのためには、この対策が不可欠として、6月15日、防除対策講習会を開催した。全戸（9戸）の農家が参加した。

センターは、5月の発生状況をふまえながら、媒介昆虫であるミナミキイロアザミウマの防除対策として、以下の提案をおこなった。ハウス切り上げ時の蒸し込み、周辺雑草の除草の徹底、「3種の神器」（定植前の農薬使用、黄色粘着版と防虫ネットの設置）の徹底、UVカットフィルムの利用。

その後、来作の取り組みについて参加者で協議し、これらの対策を実施することで意思統一をはかった。

参加した農家からは、来作は「ハウスにUVカットビニールを展張したい」と、前向きな意見もでた。

認定農業者フォローアップと家族経営協定について ～指導者間で学習～



「複式簿記→経営改善計画→家族経営協定の順で進めていきます。」

5月15日、今年度3回目となる「経営指導者育成研修」を開催した。今回は、安芸市役所と農業委員会からも外部講師として参加してもらい、認定農業者制度 家族経営協定 農業者年金 上半期の源泉徴収事務 の4つをテーマに、6月末に開催される安芸市青色申告会の講習会に向けた事前研修を行った。

昨年度、青色申告会で認定農業者申請に取り組んだ経緯があるが、今年度は、「目標達成のために具体的に何をするか？」を紙面化（＝家族経営協定）させていきたい。そのためにも、まずは指導する側の普及指導員やJA営農指導員の十分な理解が必要となってくる。参加者からは「意義はよく理解できた。次は実際に農家に指導しながら、内容を再確認していきたい。」という声が聞かれた。

タバココナジラミやミナミキイロアザミウマに土着天敵の活用が始まっています。



6月20日に、「促成ナスにおける土着天敵活用事例の現地検討会」を安芸市において開催した。この会は、タバココナジラミやミナミキイロアザミウマの土着天敵であるタバコカスミカメを活用し、両虫の発生を抑制している事例を生産者に直接見てもらい、直接園主さん利点と問題点を聞いてもらい、今後の防除の選択肢を増やしてもらうのが目的。参加者からは、効果に対する驚きとどうやったら活用できるかといった質問があった。また、生産者のグループと振興センター、JAが協力して、土着天敵を夏秋ナスハウスで活用するべく活動を始めている。

基盤整備地における地域の営農を考える会



芸西村馬の上では基盤整備事業の導入により、将来の地域農業振興について検討する組織「原池地域営農を考える会」ができたところである。事業の換地割も済み、今後は農用地の利用計画や個人のハウス移転に伴う資金計画も検討することが必要になったので、6月18日、会が開催された。

資材高騰の折、県内でもハウス園芸の進んだ地域ではあるが経営が厳しい声が出ている。10年、20年先もハウス園芸が継続していくように組織の合意形成の働きかけを今後も進める。

18t どりを目指してナスの樹姿、根の調査



5月末から6月にかけて管内約30戸のハウスで、ナスの樹姿の調査と根の掘取り調査をJA営農指導員と行った。樹姿、根の状態から高収量を妨げた原因として、採光性が悪い、切り戻しすぎなど複数が明らかになった。この調査結果を元に、来作は部会、各農家が18t どりを目指して、農家自らが策定した目標の達成のためにJA、部会と協働で活動していく。